

「学而事人」を貫き通した生涯 『清水安三』

足立 清勝

『学而事人』（かくじじじん）

この言葉は清水安三先生の教育精神を物語る終生大切にされた言葉で「学問は決して自分のためだけにするものではなく、身につけた力を社会に役立てることが大切です」という意味です。

清水安三先生は一八九一年、現在の高島市新旭町北畑に生まれました。安三少年が六歳の時に伯父に連れられ、九月二十五日に藤樹書院の藤樹祭に行き、その時の印象が生涯を通して中江藤樹先生を崇拜するきっかけとなる大きな出来事だったことが、遺稿集「石ころの生涯」の中で語られています。

安三先生は地元の小学



校から県立第二中学校（現県立膳所高校）へ入学、米国人の英

語教師ウイリアム・メルル・ヴォーリズに出会い、そこでキリストの教えに感化、大津教会で受洗。その後、同志社大学神学部に進学。その間に中国の名僧鑑真が幾度ももの苦難を乗り越え日本に渡った話に感動し、多くの人たちの助力を得て、一九一七年日本組合基督教会の宣教師として中国は奉天（現瀋陽）に赴任。翌一九一八年大連にて彦根出身の横田美穂と結婚、北京に転居後の一九二〇年華北部一帯を早魁による大飢饉が襲い、農民、幼い子どもたちが共に身の危険と死の淵に晒されます。夫妻は連日、北京郊外各地から大勢の子どもたちを大八車で朝陽門外に設置した応急施設へ連れ帰り収容します。

延べ七九九名を救出、これが学園の前身、児童収容所となります。

その後、貧しい中国人、朝鮮人の子どもたちと日本人も平等に扱って教育する崇貞工読女学校（後の崇貞学園）を設立、午前は勉学、午後は刺繍などの手仕事を指導、生徒の自立を最終目的に育てていきます。しかし、学園運営や校舎建築には莫大な費用を要し、先生は生徒たちが作った刺繍製品や自著を売り歩き、日本や米国まで寄付金集めに奔走、日夜を問わず、わが身も顧みない日々を送ります。

先生は最愛の伴侶を失っても、日中戦争で戦闘状態の最中にあっても学園運営の傍ら、貧民街に無料の医療施設設置や飲料水の井戸掘り、授産・識字教育など数多くの社会事業を推進し、「北京の聖者」とまで呼ばれます。

一九四五年日本の敗戦。

崇貞学園運営は中国政府により接収され、終わりを告げます。

一九四六年三月十九日先生夫妻はすべてを失い日本に帰国、この時、安三先生五十四才、再婚していた郁子夫人五十三才。

しかし、夫妻は学校を創りたいとの願いからすぐに行動を起こし、二十二日には一面焦土と化した東京へ移り、翌日には街中で再会した賀川豊彦からバラックの建物を紹介され新たな学園建設の第一歩を踏み出します。帰国からわずか四十八日民政部省から桜美林学園設立の認可を取り付けたのです。

以来、多くの人たちの助けと夫妻のどんな欲なまでの学園づくりへの執念は国内外へと足を延ばし、講演、著書販売、人材確保など学園建設のための献身的な行動を展開していきます。

そして、現在の一万人超の生徒、学生を擁する総合大学、桜美林学園へと発展していったのです。

一九八八年一月 清水安三先生九

十六歳にて召天。

亡くなる前日まで数限りない子どもたちに接し、愛と慈しみの心をもつて行動、実践しました。

中国には「井戸を掘ってくれた人を忘れない」の諺がありその言葉通り、北京の崇貞学園は現在、北京市有数の進学校、陳経綸中学校として多くの生徒たちが勉学に励み、その正門の傍らには安三先生の胸像や崇貞学園創立記念のレリーフが功績を称えています。

「わしは幼稚園から大学までの学校を創るのが生涯の夢」と語っていた先生、今なお東京町田市の桜美林学園は学園全体が美しい桜の木に覆われ、陶像の藤樹先生が見守る中、市民が自由に出入りのできる開放的な学舎となっており、清水安三先生が目標とした自由な学風が学内の至る所に生かされています。



清水安三先生銅像
高島市役所正面南側